

第1回「道史編さんに関する有識者懇談会」議事録

日時：平成29年6月29日（木）10:00～12:00

場所：ホテルポールスター札幌 4階「ラベンダー」

【出席者】

<委員>

桑原委員、白木沢委員、坂下委員、横井委員、山崎委員、小内委員、柴田委員、富田委員、杉山委員、北野委員、小川委員、中野総務部長（座長代理）

<事務局>

（北海道）成田法務・法人局長、角張文書館長、靄原首席文書専門員、阿部主幹

成田法務・法人局長

おはようございます。ただ今から第1回道史編さんに関する有識者懇談会を開催させていただきます。はじめに、本来であれば辻副知事が当有識者懇談会の座長を務めるところでございますが、他用務でどうしても外せないため欠席とさせていただきます。本日は中野総務部長が代理出席させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは開会に当たりまして主催者を代表いたしまして、中野総務部長からご挨拶させていただきます。

中野総務部長

皆様おはようございます。総務部長の中野でございます。本日は大変お忙しい中、この有識者懇談会にご出席をいただきまして誠にありがとうございます。今お話ししましたが、本来ですとこの懇談会、私どもの副知事の辻が座長を務めさせていただくところでございますが、今まさに北方四島における共同経済活動の調査ということで、北方四島におりますので本日欠席となりました。本日に限りまして辻の代理といたしまして、私が座長を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

既に皆様にご案内のとおり、北海道は来年、命名150年ということになっております。こうした節目に、今に至ります北海道の歴史を見つめ直して、次の世代に、更にはその先の世代に繋いで行くことが一層求められているという認識から、北海道史の編さんを行うこととしたところでございます。それに当たりまして、これから事業を進める前に様々なご意見をいただきまして、これからの編さん方針や刊行計画に反映させたいということで、本日は有識者会議にお集まりいただいたところでございます。桑原先生をはじめ研究者の皆様方には、来年度以降、編さん作業を担っていただきたいと考えているところでございます。学術的な観点、あるいは実際に編さんを行う上での観点、こういったところから専門的なご助言をいただければと考えているところでございます。加えまして、各関係団体の皆様におかれましては、それぞれの分野で、これまでの変遷の激しい現代の北海道と、密に関わってこられたご経験をお持ちであると考えております。諸先生方とはまた違った角度から幅広くご意見をいただきまして、まさに道民の皆さんの生活に密着した北海道史、そういったものに繋げていただければ、そのように考えているところでございます。

道では、これまで北海道史を3回編さんしてきております。直近では、北海道100年を契機に編さんしました「新北海道史」、そちらにずらっと並んでおります。発刊以来、「新北海道史」は貴重な歴史資料ということで、多くの研究者の方々、幅広い分野の方々に活用していただきまして、加えて、道内の市町村史を作られる皆さんに対しても、一定の道しるべ的な役割を果たしてきたと考えており、今回編さんをいたします新しい北海道史、これに対しましても、多くの皆様から多くの期待が寄せられているという状況でございます。

この懇談会でございますが、今年度中に3回開催を予定しておりますが、皆様方には今回の

新しい北海道史、これが道民の皆さんに愛されて次の世代に受け継がれる充実したものになりますよう、忌憚のないご意見、ご指導ご助言をいただきつつ進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

成田法務・法人局長

それでは本日の懇談会にご出席を賜りました構成員の皆様をご紹介申し上げます。

札幌大学名誉教授 桑原真人様でございます。続きまして、北海道大学大学院文学研究科教授 白木沢旭児様でございます。続きまして、北海道大学大学院農学研究院教授 坂下明彦様でございます。北海道大学大学院教育学研究院教授 横井敏郎様でございます。北海道大学大学院法学研究科教授 山崎幹根様でございます。札幌学院大学法学部教授 小内純子様でございます。続きまして、北海道農業協同組合中央会常務理事 柴田倫宏様でございます。北海道森林組合連合会参事 富田満夫様でございます。連合北海道事務局長 杉山元様でございます。北海道博物館学芸副館長 小川正人様でございます。なお、北海道新聞社常務取締役の北野様につきましては、用務の都合により若干遅れて到着される旨のご連絡をいただいております。また、北海道経済連合会専務理事 瀬尾英生様、北海道漁業協同組合連合会参事 伊藤貴彦様につきましては、本日は欠席となっております。

ここからは座長代理の中野総務部長が進行いたします。

中野座長代理

それでは、次第に沿いまして進めて参ります。本日の議事としては主に2点、「有識者懇談会について」と「道史編さん大綱について」、ご議論いただこうとしております。それではまず議事の1つめ「有識者懇談会について」、事務局から説明をさせます。

角張文書館長

有識者懇談会につきましてご説明いたします。【資料1】の「道史編さんに関する有識者懇談会開催要領」をご覧ください。第1の「目的」といたしましては、北海道150年を機に実施する「新北海道史」後継史の編さんに当たり、学識経験者や各関係団体等から幅広く意見を伺うことを目的に今回開催させていただきました。第2の「議題」に関しましては、「新北海道史」後継史の編さんに関する事項、その他編さんに関し必要な事項、となっております。第3の「構成員」は別表のとおりでありまして、14名の構成となっております。第4の「運営」に関しましては、懇談会は必要に応じ副知事が招集し主催する、懇談会に座長を置き副知事がこれを行う、座長は不在の場合などの都度これを代行する者を指名することができる、必要に応じ構成員以外の者の出席を求め意見を聞くことができる旨を定めております。

続いて、この懇談会の「今後の検討スケジュール」についてご説明いたします。【資料2】をご覧ください。この有識者懇談会は今年度中に、本日のほかに8月と11月の合計3回の開催を予定しております。編さん方針や刊行計画等を定めた「道史編さん大綱」に関しまして、第1回目に基本フレームを提示させていただき、第2回目に素案を、第3回目に原案をお示しさせていただきまして、それぞれの段階においてご意見を伺い、最終的に道案をとりまとめる予定でございます。その後、来年の2月を目途にパブリックコメントを実施し広く一般の方々からご意見を伺い、「道史編さん大綱」を決定する予定でございます。なお、実際の執筆と編さんにつきましては、来年度から開始する予定でございます。

中野座長代理

ただ今説明をさせていただきました内容について、ご質問あるいはご意見などございますでしょうか。特にスケジュールの点などよろしいでしょうか。

(質問等なし)

それでは概ねこのような形で進めさせていただきます。

続きまして議事の2つめ、「道史編さん大綱について」ですが、先ほどのスケジュールにもございましたとおり、本日は基本フレームを提示させていただきましてご意見を賜るということにしております。【資料3】が道史編さん大綱の基本フレームですが、併せまして「新北海道史」の概要や他県の状況、各種団体からの要望など一連の資料すべてを一括して事務局から説明をさせていただきます。

靄原首席文書専門員

【資料3】をご覧ください。これからご検討いただく「道史編さん大綱」の枠組みをお示しております。とりあえず7つの項目を用意しましたが、この他に必要な項目があれば適宜追加して参りたいと思います。それぞれ四角の中にはたたき台をお示しておりますが、これらについては後ほど改めてご説明することとし、先に資料4から資料7までを一括してご説明いたします。

【資料4】「新北海道史」編さんの概要をご覧ください。前回の北海道史がどのような編さんを行っていたのかをまとめています。今後の検討の出発点になるかと思っておりますので、少し詳しくご説明いたします。「新北海道史」の編さんは開道100年の記念事業として実施され、編集方針は4つありましたが、その1番目のものを載せております。編さん期間は昭和38年から56年までの18年間。対象期間は先史時代から昭和45年頃までです。編さん組織は審議組織と編さん実務組織の2つありました。北海道史編集審議会は、有識者にお集まりいただいて年に約1回重要事項を審議した会議です。道史編集所は実際の編集作業を行った組織です。時期にもよりますが編集長以下13～16名の職員を擁しておりました。当時は編集に携わる大学の先生方を道の非常勤職員として雇用しておりました。刊行規模は全9巻、他に「新しい道史」という名称の機関誌を77号まで、多い時で2ヶ月に1回の頻度で刊行しておりました。「新北海道史」の配布先ですが、道内では市町村や学校など、道外では都府県の図書館などで、他に1巻数千円で有償頒布もしておりました。各巻の内容ですが、第1巻の概説、これは先史から現代までを要約して分かりやすくまとめたものです。第2巻～6巻は通説という名前が付いていますが一般には通史と言われるもので年代ごとにほぼ順を追って叙述した分厚い歴史教科書のようなものです。通説は先史から近世までで1巻、次の近代は、一般には明治維新から昭和20年の終戦までと言われていたのですが、これを2～30年ごとに区切って3巻、終戦から始まる現代は1巻という構成でした。第7巻～9巻は資料編です。資料編はその時代の基本資料や重要な資料を抽出して活字化し解説を付けたものです。近年の自治体史では資料編を大変多く編さんする傾向にあります。が、「新北海道史」では資料編が3巻ですが3巻目は年表や統計なので実質2巻ということになります。この「新北海道史」、そちらに並べておりますが、第1巻の概説は薄いですが他の巻は1,000～1,500ページの大変重厚感のある造りになっております。以上が前回の「新北海道史」の概要です。

続いて【資料5】をご覧ください。これは道史編さんの目的と編さんの方針をご検討いただく資料として、現在編さん中の県と最近編さんを終えた県、9県に聞いてまとめたものです。1ページ目が編さんの目的で、右側のポイントの欄で比較していただきますと分かりやすいのですが、どの県も類似した表現になっているかと思えます。なお、多くの県は先史時代から現代までフルに刊行する形ですが、静岡県だけは続編として現代史だけの刊行で計画されておりますので、「前回の県史を踏まえ、その後の静岡県の歩みを整理し…」と言った表現になっております。2ページと3ページは各県の編さんの方針です。こちらは3つから多いところで7つの項目に分けて表記されることが多いようです。一番下に前回の「新北海道史」の昭和37年に策定した編集方針も載せております。

続いて【資料6】をご覧ください。北海道史の編さんをまた始めるということで多くの方々が注目してくださっており、そうした中で歴史系・文化系の団体から知事と道議会議長あてに

要望書が提出されておりますので、少し詳しくご紹介させていただきます。団体名を申しますと北海道史研究協議会、北海道考古学会、北海道歴史研究者協議会、北海道地域文化学会、北海道文化財保護協会、アイヌ語地名研究会、松浦武四郎研究会の以上7団体です。要望の中心は下から3行目辺りにありますとおり、『新北海道史』編さん後の状況を踏まえ、先史時代から現代にいたる本道の史的発展の歩みを…」とあります、つまり続編ではなく、先史時代から現代までという対象期間の拡大です。要望書の2枚目に具体的な要望事項が4つにまとめられております。1めが編集組織について、2つめとして記述の対象となる時代について、要望書本文で述べられている先史時代から現代までという要望の理由がここで述べられております。

「ここ半世紀の間に新たな研究成果、特に先史時代、近世史、アイヌ史・アイヌ文化、生活文化史、民衆史、地域史、自治体史等の分野における研究が蓄積され、さらに道民の史的関心と史観にも変化が認められるので、時代を「新北海道史」以降に限定せず先史時代から現代までを対象とすべき」、とあります。3つめとして前回の「新北海道史」と同様の機関誌の発行、4つめでは「新北海道史」年表の補訂が挙げられております。以上が要望書の内容です。なお、この懇談会へのご参加をお願いした際に、一部の先生方の中からも、続編ではなく全面的な書き換えをというご意見などをいただいております。

最後に【資料7】「道史の構成（対象時期）に関する検討」をご覧ください。この資料は、今までいただいた要望書やご意見を踏まえ道としてどこまでできるか、差し当たり検討した別案です。昭和20年以降の現代を対象に通史編1巻と資料編3～4巻、これを編さんの中核に据えた上で、その他に先史から現代を対象に一般道民が気軽に手に取って読めるような全通史の普及版を作成し、ここに新たな研究成果を盛り込み、さらに要望書にもあった年表の補訂版を作成するという案です。資料の下の部分に対象時期を棒線で示した図を付けております。道史の構成についてはこの後、大綱の基本フレームの中で具体的にご検討いただくこととなりますが、別案の一つということで要望書と併せた形であらかじめお示ししました。

中野座長代理

資料全体の説明に関してご質問やご意見がございましたらお受けいたします。何かございますでしょうか。

（質問等なし）

それでは【資料3】の基本フレームに戻っていただきまして、第1から順番にご議論をいただきたいと思っております。第1の目的と第2の方針を事務局から説明をお願いします。

靄原首席文書専門員

改めて【資料3】の基本フレームをご覧ください。まず第1「道史編さんの目的」ですが、他県を参考に4つの要素を例示しております。1つめ「新北海道史の後継史として北海道の現代の歩みを明らかにする」、これは全時代を対象とするのであれば特にことわる必要はないと思っておりますが、特定の時代に限るのであればこのようにいつの時代を対象とするのか明記すべきだろうということで挙げております。2つめ「多くの道民が郷土の歴史に親しみ理解と関心を深める」、3つめ「歴史的資料を共有財産として後世に伝える」、編さん事業は成果品として刊行物が出来上がるというだけではなく、調査の過程で新たな資料が発見されたり歴史資料を大事にしていこうという気運が高まる契機にもなりますので、目的の一つとして加えております。最後に「学術・文化の振興への寄与」、以上4つを例としております。続いて第2「道史編さんの方針」では7つを例示しております。目的を受けて具体的にどのような方針で臨むのかという部分です。1つめ「日本及び世界の歴史の中に位置づける」、これは北海道史とはいっても日本や世界の流れを絶えず意識したものにしなくてはならない、周辺と切り離された地域史ではなく、ということです。北海道の場合、世界という大きなくくりもありますが、例えばロシア極東部や中国など隣接する地域を特に強調することもあるかと思ひまして括弧書きで（北東

アジア) という言葉も入れてあります。また、近年は「新北海道史」の時より更に都道府県史の学術的レベルが高くなっているとされておりまして、そうしたことから2つめの「高度な学術水準」、3つめの「最新の研究成果を取り入れる」を入れております。次の「親しまれる道史」、これは「高度な学術水準」と両立させるのは大変難しいかもしれませんが、一部の研究者だけではなく一般の方たちも少し頑張れば読めるようなものにするということで、そのためには専門用語ではなく平易な表現を用いる、写真や図版を多く用いて理解を助けるといった工夫を挙げております。続いて「資料は広範囲に調査・収集する」、編さんが始まりますと公文書、私文書、その他多くの資料を幅広く道内外を問わず調査・収集することになります。史実の解明、そして叙述を奥行きのあるものにするために、広範囲な調査・収集とその分析が非常に重要です。「資料の提示に重点を置く」、実証的な歴史書であるからには叙述の証拠となる資料をできるだけ明示する。これは充実した資料編を作るということにも繋がると思います。最後に「編さんの進捗状況の公開」。多くの道民にご理解ご協力していただくためにも、編さんの進捗や成果をオープンにしていくことが必要です。以上ですが、ここに例示したものは他県史を参考にしたオーソドックスな定番と言ってもよい要素でありまして、一方で北海道史ならではの目的、方針があってもよろしいかと思います。例えば【資料5】の2ページ目、青森県の編さん方針に「青森県の歴史を北方世界の中に積極的に位置づけ、従来の「みちのく」に対する認識の変革を図る」という強い意気込みを感じさせる項目があります。また、ここには載せておりませんが、10年ほど前に編さんを終了した「新札幌市史」では、「迅速に近代都市へと発展した札幌、その因って来る所以を明らかにする」ということを編さん方針に挙げております。こうした地域ならでの表現を盛り込むということになりますと、北海道という地域をどう捉えるか、また北海道の歴史の特徴、個性をどこに見るかということが重要になって参りますので、その辺りのご意見もいただければと思います。なお、これからご検討いただきます目的や方針は、いつの時代を対象にどういったものを刊行するかという、これは第3の構成の内容や表現に繋がっていく部分もあるかと思いますので、どちらを先に検討すべきか悩ましい部分もあるのですが、とりあえず先に目的や方針のところでご意見をいただいて、構成が固まった後で必要があれば遡って修正するという手順にしたいと思います。まずはどのような道史を編さんすべきなのか、漠然としたイメージでも結構ですので、ご意見を賜りたいと思います。

中野座長代理

それではこれからご意見を伺って参りますが、本日お示ししておりますのは基本フレームでございますので、次回の懇談会までにこの骨組みを文章化する作業を行います。文章化するに当たって、盛り込むべき要素や表現などのご意見をいただきたいという趣旨でございます。それでは第1の「道史編さんの目的」について4項目挙げておりますが、足りない部分や表現方法などありましたらご意見を伺いたいと思います。

白木沢委員

目的と方針のところは概ね妥当なことが書いてあると思いますが、最初の『「新北海道史」の後継史として北海道の現代の…」というところで、現代史ということが明記されています。先ほど【資料5】で他県史の調査をされて、このパターンは上から3つめの静岡県史に近いイメージになっていると思います。それ以外の都府県史は原始・古代からやっているとありますが、今回は「新北海道史」の後継史に限定するのか、あるいは新々北海道史というような「新北海道史」の次の北海道史をもう1回やるのかということは大きな違いなので、そこについては十分に検討した方がいいと思います。私としては他の県史を見てもほとんどが古い時代からやっているとすることと、第2の方針のところでも新しく出す北海道史のイメージを考えた時に「北東アジアの歴史に位置づける」ということを看板にして、時期は1970年から始まるというのは違和感を感じます。今の研究で北方世界とか北東アジアというのは江戸時代くらいから盛

んに研究されていますので、1970年から始めることのメリットと言いますか意味というものが今ひとつ分からないので、「新北海道史」の後継史ということについての再検討がいるのではないかと思います。

中野座長代理

ありがとうございます。フレームの第3の「道史の構成」とも関わりますし、先ほどご説明しました【資料6】や【資料7】とも密接に絡むところで、どこをターゲットとした道史とするのかということをもっと最初に決めなければならないということだと思います。この編さん期間の取り方、どこからどこまでを編さん対象とするのか、ご意見をお聞かせ願います。

横井委員

あまりゆっくり議論する時間もないと思いますので、2つだけ考えていることを言いますが、1つは前の「新北海道史」ですが、昭和45年まで書かれているかということと教育の部分についてはもう少し前のところで止まっています。昭和45年までしっかり書いてあるかということ、その時代の研究の状況もあって、そんなに緻密には書かれていない。ですから昭和45年から書き出すとうまく接続しないので、後継史にはなりにくい。少なくとも1945年から書かないといけないのではないかと思いますというのが1つめの意見です。

それから少し話がずれてしましますが、教育の場合には道教委の教育研究所で作られている「北海道教育史」というものが出ていまして、この戦後編というものが7冊ほど出ていますが、それも戦後の早い時で止まっています。90年代の後半に資料編が5冊出されていて、そこには「平成12年から『北海道教育史』をまた新しく作る、そのための基礎資料としてこれを編集した」と書いてありますが、その後何も動きがないので財政事情なのか分かりませんがストップしています。道教委と教育研究所にどういった「北海道教育史」を作ろうとしているのか、あるいはそのプランはもうないのか確かめていただかないと、準備しているのであればそれを活用したり一緒にやるようなことも有効かもしれないと思います。

中野座長代理

ありがとうございます。どの期間をターゲットに編さんするか他にご意見ございませんか。

坂下委員

「新北海道史」の場合、最後の巻は次の準備のためにとりあえず置いておいたということですから、今回の道史を1970年から始めるという案はないだろうということが1つ。それから戦後第1次大戦後の枠組みで考えると、1970年からだと大陸との関係などがなくてこないと感じていまして、お金のことや期間のことがあると思いますが、最低でも第1次大戦の辺りから始めないと、戦後改革の位置付けなど昔はスパッと切って新しい世界が始まったみたいな議論をしていましたが、今は連続的に捉えなければならぬと考えられているので、戦後から始めるにしても助走期間としてちょっと前まで遡っておかないと、1945年以降の位置付けができないという感じがしています。できればもっと前からやっていただけたほうが良いとは思いますが、一応10年の設定ですと、そんなに昔からはとても無理だと思います。

中野座長代理

ありがとうございます。他に如何でございましょう。

山崎委員

目的に関していくつかございまして、「歴史的資料を共有財産として後世に伝える」というところと「学術・文化の振興への寄与」というところを是非重視してやっていただければと思

っています。私はどちらかと言えば戦後でも新しい道史、道政史に関心を持っていますが、この時代を対象とした道史、道政史の成果と教訓の双方を学べるような道史の編さんということに是非心がけていただければと思っています。言い方を変えると、「今の北海道や、これからの北海道の在り方を考えるための、基礎資料ですよ」というところを踏まえて行ければと思っています。この時代の北海道は色々な大きな動きがありまして、一つの例で言うと苫東の開発が始まって、残念ながら失敗して再スタートと、そうした一連の過程などがどのように始まって何でだめになったかといったところを、後世の世代が道史を読んで、「そういうことだったのか」と分かるような視点が是非欲しいですし、この当時北海道は、環境アセスメント条例を全国でもかなり早く、都道府県では一番早く制定されていますので、北海道の実践というのは、全国に先駆けてやっているといるところもありますし、そうしたところを体系的に学べるというところを是非踏まえたいというところではあります。

編さんの方針のところでは申しますと、実は今、北海道大学に來ている留学生で北海道のことを勉強したいというテーマを持っている学生さんが増えておりまして、例えば戦後の北海道の開発の歴史で修士論文を書きたいという学生さんもいましたし、意外なことに、樺太の引揚の人がいかに戦後、北海道に渡ってきて定着してきたのかということを博士論文で書いたイギリス人の留学生がおります。ですからそうしたことをもう既に外国人の留学生が学ぶような時代になっておりますので、これが出来るのは10年後ですが、これからどんどん留学生が増えてきますと、北海道の様々な今日までの発展や色々な事柄について学びたいという時に、この道史というのは最初の手掛かりになりますので、そうした視点で是非きちっとしたものを作っただけであればと思っています。

もう一つ資料のことで申しますと、私も限られた分野ですが、戦後からの北海道の通史みたいなことを研究してきたことがあります。現代になればなるほど資料がない。ですから最初の田中道政とか町村さんの時代は色々書かれたもので構成ができますが、ぎりぎり堂垣内さんの頃はあって横路さんの頃になると全然ないという感じになってきてまして、ですからそうしたところをもう一回洗い出すのは非常に大事な作業なので、是非、資料収集・調査に本腰を入れてやっていただきたい。形式的に担当部署に行き、そんな資料はありませんという形でお終いではなく、物置の隅に段ボールに積まれてあるような資料が、この機会に見ると非常にありがたいということがあります。資料収集について形式的な照会に止まらない形で、本腰を入れて探し出していただきたいと思います。また近年の歴史を調査する手法で、いわゆるオーラルヒストリーという手法がありまして、どうしても文章という形や資料、日本人だときちんと日記などを付けることがないので、それを補うために現存の方にインタビューをして、一つの歴史資料とすることがありますが、そうしたことも是非今回の道史の編さんの中で取り入れていただければと思います。

中野座長代理

ありがとうございます。他に如何でございましょうか。それでは対象期間について事務局の方で何かありますか。

靄原首席文書専門員

対象時期は、たたき台として示しました昭和45年以降を対象として、それから通史編1巻と資料編4巻の計5巻、これは当初の道案ということですが、それに加えて先ほどご説明しました戦後から作る、また、先史時代から扱った普及版の通史と年表も作る、という案をお示しましたが、この2案と違った提案もあろうかと思っています。具体的に資料編を何巻にするとか何編を作るのかとかいうことについては、次回の懇談会での課題としたいと思いますので、今回は、いつを対象とするのか、資料編を多く作るのかどうか、といったような大枠の辺りを、【資料7】をもう一度ご覧いただきながら、もう少し詰めていただきたいと思っています。

中野座長代理

元々この新しい道史の編さん事業ですが、予算的な制約もございまして前回の「新北海道史」以降の部分に特化して始めようということで動いていたわけですが、やはり先生方からもお話ありましたとおり、「新北海道史」は 1970 年まできちっと出来ているわけではないので、そこから先を継ぎ足せばいいというものではない、まさにおっしゃるとおりです。その一方で、今回は北海道命名から 150 年、おそらく都道府県の正史みたいなものは、100 年単位ぐらいでやられるところが多いのではないのでしょうか。今回は 50 年の刻みでありますので、太古から全体の正史を作り直すというだけの財政的な余裕や時間的な余裕が、私どもにはないということもありまして、その辺をどう調和させていくかということかと思っております。そういった中で、先ほど【資料 7】でお示しさせていただいたとおり、一つの考え方として、1945 年の 8 月 15 日でスパッと切って、それ以降という形は非常に難しいとは思いますが、一つの区切りとして戦後、ものによっては第 1 次世界大戦後まで遡るところも出てこようかと思いますが、主なところでは戦後で全編を通しつつ、一方でこの 50 年間の前の道史からの研究成果なども反映できるように、全通史の普及版を広く皆さんに読んでいただける、あるいは皆さんの資料としていただけるようなものも作り、更に年表も補訂するような形で進めさせていただきたいと考えているところでございます。私どもで考えております副案について更にご意見をいただければと思います。如何でしょうか。

小川委員

私は北海道立博物館の職員ですので、立場的に北海道の色々なことも考えながらということになりますが、博物館で北海道の自然・歴史・文化の展示をさせていただいて、お客様から色々な感想やご意見をいただくということを踏まえて、今回のことを考えさせていただくと、今先生方からお話があったとおり、戦後、あるいは 1970 年以降だけ切って足すというのは色々な形で難しいと思えますし、今回 150 年の事業の中で行うということであれば尚更、それ以前の北海道の歴史をもう一度捉え直す部分ということを含まざるを得ないだろうと考えております。理由は、一つはこの資料の中でも書かれておりますとおり色々な分野で研究が進展していて、特に歴史の見方に関して大きく変わっているところがあって、特に博物館で展示しておりますアイヌの人たちの歴史に関しては、ここ数十年で考え方が大きく変わっていると、一方で「新北海道史」の中で描かれているアイヌの人たちの歴史というのは、それ以前のかなり古い枠組みに縛られているところがあるので、そこに関してはむしろ私どもの所に「北海道史にこんなこと書いてあるけどこれでいいのか」というご意見をよくいただくことがありますので、仮にそれを踏まえて、というような言い方を今回の目的に書いて、それ以降をやりますというようにすると「新北海道史」を今から公に追認してしまうような印象を与えるところもありますので、そのところは新しく研究が進んだ様々な分野については、それをある程度取り入れて、踏まえていくというような形が望ましいと考えております。今、アイヌの歴史を例に出しましたけれども、北海道としての立場から見ても「北の縄文」というようなものを強く打ち出しているということがあって、この背景には、いわゆる先史時代に関する研究の進展があると、あるいは世界自然遺産というようなものを打ち出していることからすれば、ここ 30 年の自然保護活動だけではなくて、やはりかなり長いスパンで見た北海道の環境史のようなものを見据えた方がいいということがあります。あるいは北海道の様々な産業をご紹介していく時にも、ここ 3・40 年の色々な産業の変化が大事であるということと同時に、それぞれの産業が 100 年 200 年というスパンで北海道の中でどういった形で伝わってきたかということも踏まえないと難しいと思えます。あるいは北方四島の問題などの北海道にとってホットな問題を扱うにしても、戦後や 1970 年からやると「北方領土問題がありますよ」というところから入ってしまうことがあって、北方四島域に対する日本、あるいは周辺地域の長い歴史の関わりの扱い方がどう

しても図式的なところに止まってしまうということがあるので、ある程度古い時代に遡って、そこは特に新しい研究成果や研究分野というものに注目しながら反映させていくことが望ましいと考えております。

一方で、今、中野部長からお話がありましたとおり何十巻というレベルのものを一から作るのかということに関して言えば、時間的な問題や予算の問題など色々なことがあると思いますので、無尽蔵に膨らませるという話にはならないだろうと。また、今、先生方からお話があったように、戦後の新しい時代に関わることで重点的に取り上げていくべきことがたくさんあって、博物館に勤めておりますと、今お話に出たような樺太からの引き揚げ、戦後の入植といったここ4・50年、あるいは6・70年で北海道民が経験した様々なこと、炭鉱の閉山ですとかも含めて、これらに関しての想いが大変強くて、今から50年前に編さんされた「新北海道史」の時には、明治・大正の開拓にかなり重点が置かれて、そのところの研究が進んだとすれば、むしろ今回は、ここ数十年、北海道民が経験した様々な出来事というようなものに重点を置いていくということも大事だろうと思います。そういった意味ではここ150年の歴史、特に新しい時代の歴史に重点を置きながら、けれども北海道のかなり古い時期からの最近の研究成果を取り入れて、「北海道民が今北海道のことを振り返る時にはこの本を読む」、というようなものを作るのが望ましいのと考えております。

白木沢委員

今、小川さんの方から言っていたのですが、実は、「新北海道史」その後継史という言葉に抵抗があるという意見を何人かから聞いておまして、アイヌ史の専門家や近世史の専門家で、その部分は書き直しが必要なので、今でも北海道の正式な歴史の本だと再アピールするのは非常にまずいという意見を聞いています。だから「新北海道史」の後継だということとはなるべく言わないでいただきたいと。仮に時代の区分が現代史中心になるにしても「新北海道史」の続編、続巻だということとは言わないでほしいということも言われております。それから内容的にアイヌ史、近世史と近代の戦争の歴史のところ、大分この2・30年の変化があると思います。道民が色々な形で知識を得ていますので、道新などに書いてあるような様々な戦争の話を情報として皆さん共有している中で、新しい北海道史を出す時に、最近の発見されたこと、知られていることを踏まえないといけないと思います。やはり、戦後史を重視するにしても、そこだけ書きにくいという感じがします。先ほど中野部長の方から刊行計画をどうするのかということで、私、「新札幌市史」の編集員を14年間ほどやっていましたが、この計画で10年間で5冊というのは、時間も長いですし冊数も多いなと思って、最初聞いてびっくりしました。財政的に可能なかどうか疑問でしたが、仮に10年間で5冊というのが可能だというご判断であれば、この範囲で編目構成、中身についてはいろいろ考える余地があると思います。時代を延ばした時に先史時代や江戸時代の専門家が必要になると思いますが、普通は部会制を取りますので同時にスタートします。部会制を取れば、先史時代も江戸時代も戦後史もみんな10年間フルに使えるわけです。「新北海道史」や「新札幌市史」は部会制を取っていませんでしたので、全員が全部の巻を書いています。ですから10冊なら一人の編集委員が10冊書いています。2年とか3年に1冊出すというのは、書き手の方から見ると3年に1本通史編を書いて、それが終わったら次の3年で次の巻を書くということで、同じメンバーで書き続けるわけです。部会制を取るか取らないかで全然違ってきますので、今回10年間で5冊という枠が仮に認められたとしましたら、是非部会制を取っていただいて、同時にスタートして10年かけて早めにできた巻から出していくというようなことであれば、十分この事業規模で江戸時代や先史時代についても扱えるのではないかと思います。

中野座長代理

道史編さんの組織の話まで及んでおりますが、基本10年間で5巻体制、この枠内であれば

財政的にも対応が可能ではないかと我々見ております。北海道の正史の編さんとしてもこれが最後の作業ということでは決してありませんので、また更に50年後におそらく北海道命名200年の節目で正史編さんが待っているかと思えますと、この50年の節目でやるべきことはどこからどこまでなのか、50年ですので限定的になるではないかと我々思っておりましたが。

横井委員

この【資料7】の要望を踏まえた案について確認させていただきたいのですが、「新北海道史」は戦後の部分は書いてはいても非常に不十分な段階なので、極端に言うとは戦後は北海道史はなかったと言ってもいいと。だから戦後史のところはきちんと書くところが大事だと思います。通史1巻となっていますが、これは見直しの余地があるということですね。どんなイメージで考えればいいのかというと、あそこにある「新北海道史」の1冊がありますが、1冊に全分野が盛り込まれるとすると1分野すごく薄くなると思います。例えば教育ですと、学校教育だけではないので非常に細かく分野が分かれています。また、この通史の作り方ですが、私はまず資料編をしっかりという考えもあるのですが、資料も膨大にこの戦後に関してであると思うので、資料の所在をしっかり通史の中で書いていけば、資料編をたくさん出さずに通史をもう少し膨らますというやり方でもいいと思います。その辺は検討の余地があるようにしていただいた方がいいと思います。

それから、【資料7】の下の方に全通史普及版とありますが、これは「新北海道史」を基にしながらというイメージですか。先ほど皆様もおっしゃっているとおり、かなり学問が変化してきて新しい事実なり認識が出来てきていますので、それを取り入れようとするとは結構労力がかかるというか書き直すところが出てくると思います。だから過去のものを利用してピックアップしながら書くというにはいかならないと思うので、この全通史普及版というものがどんなイメージのものなのか教えていただければと思います。

靄原首席文書専門員

ご存知のように、近世以前の部分というのがかなり変わってきているので、それだけでもかなり大変な作業になると思います。「新北海道史」の枠組みをそのまま利用してということではなく、かなりの部分を新しい学説で書き換える、新たに編さんし直す、ただし一般の人にも分かり易いような形で書き改める、改めるというより新たに書くと言った方が近いと思います。

横井委員

通史という形にされるのであれば、是非そういう方針でやっていただきたいと思います。

靄原首席文書専門員

通史編の方ですが、1冊1,000ページで例えば戦後からですと、かなり1分野当たりの分量というのは、この「新北海道史」の分量に比べてコンパクトになるだろうとは思いますが、ただ、現代部分の資料編の書き方として資料を細切れに抽出して、それに細かい解説を加えていく、それで資料を読みながらその時代を把握するという、現代部分の資料編というのはそういう編さんの仕方をしているようです。ですから、簡単に読める1冊、簡単といってもかなり分厚いものですが、プラスもう少し知りたい人には、資料編で直に資料を見ながらその時代を資料から把握できる、解説を見ながらさらに細かく理解するといったイメージで資料編を活用できないかと考えていました。資料編の分量、通史編の分量についても、これは一つの案でありますので、いろいろ提案いただければと思います。

桑原委員

通史編につきましては、私も若干相談されてお答えしたわけですが、「新撰北海道史」や「新

北海道史」で似たような形態を取っているわけです。今回の名前が新々北海道史になるのかどうか分かりませんが、近代以前を新たに作り変えるという余地が時間的にも財政的にも難しいというのであれば、今の時点に立った色々な分野の研究成果を盛り込んだ分かりやすい通史を1巻にまとめて付けたらどうかと、従来の伝統を踏まえて手配したらどうかとお話しさせてもらった経緯がございます。ただし、それを1巻でやるかどうかということはまた別の問題なので、現代まで膨大な歴史的な時間があるわけですから、場合によっては上下2巻にするということも考えられると思います。いずれにしても通史をもって先史から現代までの部分を視野に入れてまた編み直すということをやると同時に、年表につきましても、あれはなかなか良く出来た年表ですから、昭和40年代から後を付け足すという格好にして新しい北海道史の編集に資するというようにしたらどうかということでございます。

中野座長代理

ありがとうございます。今桑原先生からお話がありましたとおり、先生のお話のようなイメージで我々も進めて行きたいと考えていたわけです。制約要因もある一方で新しい北海道史にご期待いただいている部分も多々ありますので、その辺のバランスをうまく取りつつ出来るところまでやるという形で進めたいと思っているところでございます。

白木沢委員

資料編をたくさん出すという提案になっていまして、これは他府県の事例を踏襲して、本州の方はこのパターンがほとんどで、北海道としては初めて資料編重視という計画になっていると思います。そこは一般の自治体史の在り方としては望ましいと思いますが、資料編が多くなると、作る方の都合で考えますと、資料調査ですとか資料に即した解説というのは相当時間がかかることで、他県を見ても資料編を多く出しているところは、それに時間をかけています。県内の個人所蔵文書も含めて調査をして集めてから中身を吟味して、筆耕、活字にしていこうということで、非常に時間と手間がかかっていると思います。北海道は、伝統的に資料編は少ないということで、「新札幌市史」も資料編が少ないですが、部会制を取っていないので通史の執筆者が同時に資料編を作りますので、そちらがついで仕事になっていた。他の県は資料編のために多くの人員を使って、大学院生総動員とかアルバイトをたくさん使って作業をやっています。その辺の体制を考えた時に、仮に財政的なことですとか人件費とかを考えますと、資料編が多くなることによって仕事量が増えると思います。北海道の場合は本州とは違い、通史編を中心に作るという伝統があって、通史を書いた先生方は大勢おります。そういったノウハウがあるので、通史編の方を増やして資料編を限定した方が、おそらく作る方としてはやりやすいと思います。それから、読んで分かりやすいのは資料編より通史編の方だと思います。本州で資料編が盛んなのは、中世、近世の古文書が個人の家がたくさんあるので、それが活字になって初めて利用できるからです。北海道の場合は特に戦後史、現代史を考えますと、そういう個人資料がたくさん出てくるという想定も出来ませんので、資料編の方は少し弾力的に考えてもいいのではないかと思います。

中野座長代理

先ほど山崎先生からは、資料の収集も是非というお話もいただいており、行政資料に限って言えば、もうそろそろ横路道政以降の資料は文書館の方で公文書として体系的に保管されていまして、そちらの方は散逸せずに集められると思います。むしろ皆さん（企業・団体等）がお持ちの資料の方が、このタイミングでしっかり集めておかないと散逸することになってしまうかもしれません。別途進めております資料収集とも上手くリンクさせながら、資料編に必要なボリュームはどれくらいなのかということも議論していただければ、ある程度そちらのボリュームを抑えつつ通史編に力を振り向けるということも可能なのかもしれません。

既に他の項目までご議論が及んでおりますので、後の項目で補足して説明が必要なものがあれば説明してもらいますが、道史の構成以降の項目です。

靄原首席文書専門員

それでは、第5「道史編さんの組織」についてご説明いたします。これは構成員を含めた推進体制に関わる部分ですが、まず「道史編さん会議」、これが道史編さんの最も上位の組織で、道史編さんに関する重要事項を審議していただきます。この有識者懇談会をほぼ引き継いだものを想定してしております。年1回程度開催して編さん終了まで継続いたします。その構成員ですが、学識経験者の先生方には下にあります「道史編さん専門会議」という実務的な組織で、恒常的に活動していただくこととなりますので、編さん会議には専門委員からお二人に参加していただいて、その代わり各界団体関係者や有識者をもっと増やしまして、進捗状況の報告などを基にご意見を伺うという体制を考えております。

実際の実務を行うのは「道史編さん専門会議」です。これは企画・編集・調整を行う編さん実務の中枢に当たる組織で、学識経験者で6・7名を想定しております。年6回程度の開催が必要かと思っております。更にその専門会議の下に「各巻担当者会」という組織を必要に応じて設けて、発行する巻ごとに、専門会議で調整した方針に基づいて、調査や編集を行う実働組織です。構成員として上げております専門委員と調査執筆委員ですが、専門委員が企画・調整・調査・執筆全般を行うのに対して、調査執筆委員は、企画編集以外の調査や執筆を行うことを想定しており、かなり大勢の先生方に参加していただく考えです。また、知事が委嘱して任期は2年で更新を妨げない、という形を考えております。先ほど並行して進めるというようなお話もありましたが、実際に複数の担当者会を同時並行で始めるような形ですので、先生方にも掛け持ちで参加していただくことになろうかと思っております。これらの組織、機能、構成員、組織の名称といったこともありますが、ご議論いただければと思います。

また、「普及広報」についても書いてありますとおり、先日、道史編さんのホームページを立ち上げましたが、その中で進捗状況、あるいは資料調査で判明したことなど、折に触れて発表できるような場として活用していきたいと考えております。また刊行の際には先生方に記念講演をやっていただいて、道民の皆さんに知っていただくようなことも考えております。

最後に「事務処理」のところでは、編さんを担当する部署としては総務部法務・法人局法制文書課内に専門の事務局組織を立ち上げることを考えております。

どのような割合で通史編、資料編、全通史を作るのかといったことも組織の問題に関わってくると思いますが、現在考えている体制は以上のとおりです。

中野座長代理

白木沢先生がおっしゃっていた部会に相当するのは各巻担当者会ですか。

靄原首席文書専門員

そのような想定です。

中野座長代理

全体このようなフレームになっておりますが、やはり一番のところは対象の期間をどこからどこまでを切り取って編さんをするかというところではないかと思っておりますが、全体見まして他にご意見などございますでしょうか。

坂下委員

要望書にあります編集機関誌については、冊子体になるかどうか分かりませんが、編集者のやる気を出させるということが非常に重要なことだと思いますし、色々な方から最新の研究動

向を書いていただくこともいいことだと思います。「新北海道史」の時の機関誌を読ませていただきましたが結構面白いので、是非やっていただきたいと思います。

中野座長代理

ホームページは立ち上げておりますが機関誌はどうなりますか。

靄原首席文書専門員

実際に通史なり資料編なりに盛り込むことは限られていまして、それ以外のところで成果を示す場所も大事なところもありますが、それに費やされる労力や時間、それを配布するというのを考えますと、紙媒体ではなくホームページの中でと考えております。

中野座長代理

実際の編さん作業の進捗状況を見つつ、機関誌がいいのかホームページで広く広報するのがいいのか今後検討させていただきたいと思います。いずれにしても道史そのものを書いていただく分量というのが限られてしまいますので、調査で得られたものなどが仕舞われてしまわないような仕組みというのは考えていきたいと思います。

白木沢委員

機関誌を出す意味ですが、通史編、資料編の本体が10年計画で、例えば6年目7年目くらいに刊行を予定するとしますと、刊行の年の数ヶ月か1年くらい前に動き出すというのが普通のパターンなので、通史編、資料編本体が出ればよいと考えていると結局直前になってバタバタ準備するということになりがちです。機関誌は事業1年目から出して10年間出し続けますので、執筆者の先生達が常時仕事をするようになります。「新札幌市史」では、全執筆者が書くコーナーがあったので毎号書かされてそのために勉強します。ですから雇った執筆者を10年間働かせるためには、機関誌がないと本編が出る直前にバタバタ準備するということになってしまうので、むしろ編集側がコンスタントに仕事を進めるためには出した方がいいと思います。紙媒体か電子媒体かということは今の状況に合わせたらいいと思うのですが、出す意味としては内部的といいますか執筆者の仕事のペースを作っていくという意味もありますので、出した方がいいと思います。

中野座長代理

他にございますか。

小内委員

4月から法学部所属になりましたが、基本的には地域社会学の方なので現代を中心にやっていて、それで声を掛けていただいたと思っていました。要望を踏まえた案に対しては2つに分けることで両方が中途半端にならないか、その辺りが心配という印象を持っております。先ほどの桑原先生のお話で全通史編を2巻にすることを検討するということでしたが、通史編についても資料編と併せて柔軟に考えていくという形で理解してよろしいでしょうか。

中野座長代理

そこについてはどうですか。

靄原首席文書専門員

巻数についてはこれから検討していただくことですが、どちらも巻数が広がっていくという側面も確かにあると思います。全通史は、新たな研究成果がかなりあるということは勿論で

すが、本当に専門的な細かい部分まで書くのか、それともそのエキスを入れたものを一般道民に分かりやすいようにコンパクトなものに圧縮して提示するのか、その辺りの技術的なこともあるとは思いますが。戦後から書くとすれば通史編はどれくらい必要だろう、全通史としてまとめるものについてもこれくらいは必要だと、その辺りまず通史について固めていただければ助かります。

中野座長代理

いずれにしましても予算的な制約や時間的な制約がある中でのことになります。本来いい道史を作ろうと思ったら際限なくが一番いいのかもしれませんが、ある程度制約がある中で最大限可能なことをということで結論を見い出して行ければと思っております。

小内委員

現代というと終わりの方なので、何年までやるかというのも気になるところですが。

靄原首席文書専門員

直近までの通史というのは難しいので、想定としては2000年くらいまでとは思っております。直近のことは歴史的評価が定まっていないので書きづらいということがあるようです。資料編はどこまで、通史編はどこまで、年表は直前までいいたろうなど色々あると思っておりますので、追々先生方に専門的な見地から詰めていただきたいと思っておりますが、一般的には、通史編は直前までにはならないだろうと想定しております。

中野座長代理

【資料7】をご覧くださいますと2000年の所でグラデーションになっておりますので、こんなイメージです。

桑原委員

高橋知事は何年からでしたか。

中野座長代理

高橋知事は14年目になりましたので2003年からです。年表の方はもう少し直近まで行けると思います。

白木沢委員

要望を踏まえた案ということで少し遡ってということは賛成ですが、通史編と全通史普及版の関係ですが、どちらも道史編さんの事業で作るので、作る方から言わしていただくと、普及版通史よりも通史の方が書きやすいです。だから、まず通史を近世・近代・現代の3巻構成、あるいは2巻構成くらいで準備して行って、事業の終わりの方で普及版が書かれるというイメージを持っていて、先に普及版は無理だと思います。実際の通史を書く作業が始まって執筆者達がきちんと10年間働くかどうかが一番の問題で、我々がいくら議論しても書き手は執筆者ですから、そのためにはモチベーションが必要です。締め切りに向けて資料を集めていただいて書いてもらうということの繰り返しになるので、普及版を出すことは結構だと思いますが、通史編として同じ企画で少し厚めの本で1,000ページくらいを想定しておいて、そこで編目構成を作って各自が自分の仕事を進めていくという方がおそらくやりやすいのではないかと思います。それがあれば普及版の方はその中でセレクトしながら吟味していただくと、通史を書いた人が普及版の原稿も考えるというイメージなので、作る側の手間とモチベーションを考えた時に10年間で通史が複数あって、普及版を後の方で出すというのは十分可能かと思っております。

靄原首席文書専門員

先史時代から全部書き直すのが一番望ましいとは思いますが、年数や経費の問題がありまして、じっくり取り組むのは戦後からと、その代わり全通史の部分で普及版を作ろうということで、欠けている部分を補って何とか 200 年の編さんに繋いでいこうという案です。ですから全時代について厚い通史を書いて更に全通史の普及版も作るという案ではないです。

白木沢委員

ですから要望を踏まえた案の変形というか、通史と資料編の冊数については考え直せるということでしたので、通史が複数になると資料編が減ると思うのですが、執筆者の数は時代が増えると増やさざるを得ないと思います。ただ、今のままの案でも戦後史の通史と資料編が 3 冊ということで相当人手がかかるとは思います。北海道内の研究者の分布を考えた時に戦前や近世が得意な方が多いので、現代史をやるから集まってくれと言っても誰が集まるかという問題があると思います。それを考えた時、むしろ近代や江戸時代もあると頼みやすいと思いますので、実際に集まってくれそうな人達の分布を考えて頼みやすさを考えると、戦後編で通史 1 冊、資料編 3 冊というのはむしろ大変ではないかと思います。

中野座長代理

実際にどういった方々に執筆していただくかということは今後調査していかなければなりません。その際に近世・近代の方が層が厚いということで、そういったことも念頭に置きつつ全体の構成をどうするかということを考えなければいけないことは分かりましたので、その辺も踏まえて考えたいと思います。他に如何でございましょうか。

横井委員

組織に関しまして、編さん会議、専門会議と執筆者に関わる組織はだいたい分かりました。前の「新北海道史」の時は道史編集所という組織でしたが、今回は専門の職員の方というのはどのような組織になりますか。

靄原首席文書専門員

現在は文書館の中で準備していますが、今後、文書館とは離れて、編さん室のような組織を作ることを考えておまして、そこの事務職員は道職員ですが、以前のように大学の先生方が道の非常勤職員になるという形ではなく、調査や執筆の都度、謝金をお支払いするという形を考えております。先生方に担当者会に集まっていたりというようなことをまとめていくような専門の職員というのは、かなり吟味してこれから集めていきたいと思います。その核になる職員がいて、先生方のスケジュール管理やフォローができる職員の配置を考えております。

横井委員

「新札幌市史」での経験で言うと、専任の職員が資料を整理して、その編さん室に行けば色々なものが揃っているという状況を整えてくれていました。皆さん大学の教育活動など色々やることがあるので、そこの体制をきちっと作っていただかないと自分達でやっていくとすごく時間がかかってしまうので、そこのところをお願いします。

桑原委員

先日、新聞で道が考えている 150 年事業を拝見しましたが、あまりぱっと目立つようなものがないと思いました。その中でこの「新北海道史」の続編の編集というのは後世に残る大変重要な事業だと思うので、やはり一定の予算をかける意気込みをもって取り組んで欲しいと思

ます。お聞きしたところ文書館というのはあまりお金がないところと伺っていましたので、そこは改善される見込みはあるのでしょうか。

中野座長代理

確かにご指摘いただきましたとおり、北海道 150 年事業のおそらく目玉の事業でありますので、普段の文書館はあまり予算はないですが、これは北海道としてしっかり取り組まなければいけない事業ですので、きちんとした予算は確保して取り組んでいきたいと思っております。ただそうは言いましても北海道全体で見て非常に財政状況が悪い時期でもありますので、北海道としては頑張ったけれど世間的にはまだ足りないという状況になるかもしれませんが、きちんと予算を確保するように頑張るよういたします。本当は、道の正史ですので、道でしっかりお金を出さないといけない話ではありますが、ご賛同を得られるのであれば、ご賛同頂ける方々からご寄付を募るといったことも考えなければいけないかもしれません。

本日色々貴重なご意見をいただいておりますので、本日お示しした道史編さん大綱のフレームに肉付けをしまして、文章にした大綱を次回の懇談会でお示しをさせていただこうと考えております。ただ元々は、今回で盛り込むべき骨子を決めて、次回に大綱を文章化したものをお示しすることを考えていましたが、色々大変貴重なご意見をいただきましたので、今日の時点では書く内容を決めきらずに、いただいたご意見を踏まえた文章を我々の方で作らして、次回その文章をベースに、またご議論いただければと思っております。若干ご意見にも違いがありますので、全てのご意見を盛り込んだものは作れないと思っておりますが、いずれにしましても、次回の会議の一定程度前には文章化したものをお示しさせていただいて、次回の会議でご議論いただくというように進めていきたいと思っております。

文章を作るに当たりまして他にご意見がありましたら、如何でしょうか。文章を作るに当たってこういうことには触れて欲しい、こういう話題は入れて欲しいなどありませんか。本日お忙しい中おいでいただいた団体のみなさんで何かご意見ございませんか。

(意見等なし)

それでは他にないようでございますら、本日はこの辺りでと思っております。なお大綱を文章化するに当たってこういった論点を入れてほしいということがありましたら、事務局にお寄せいただければ反映させていただきます。

今回は 8 月 2 日水曜日の午後 2 時からこの場所で開催させていただきたいと思っております。8 月 2 日の 1 週間～2 週間くらい前までに大綱の素案をお送りしたいと思っておりますので、それをお目通しをいただいた上で次回ご議論をいただきたいとおもいます。

次回の大綱素案の意見交換に当たりましては、順次決めていかなければいけない部分については、ご議論をいただいた上で決めさせていただければありがたいと思っておりますので、ご協力をいただければと思っております。あと他に事務局の方から何かありますか。先生方からこの際何かございますでしょうか。それでは以上をもちまして本日の懇談会は閉会させていただきます。本日は大変ありがとうございました。